うたそら

2026.
July
No.33

Utasora

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03

テーマ詠欄 「海」 …… 14

一首評 「そらよみ」 …… 16

短歌リレーコラム 「望遠鏡」 …… 17

リレーエッセイ 「いちごいちえ」 …… 18

次回予告・編集後記 …… 19

うたそら

2026. July No.33

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

明里水せ	@m_iya_o
あき子	@ponko_san
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
井倉りつ	@uta_litz
石川順一	@Hitler57
宇祖田都子	@shinnsyutu2020
うみ	@x0uminokokoro0x
泳二	@Ejishimada
織部ゆい	@yui_oribe
柿﨑薫	
梶原一人	@MrDekopin
歌島孟	@Sinn1990
涸れ井戸	@kareido1111
北乃銀猫	@Silbernekatze_
北谷雪	@kitaya_misomiso
橘高なつめ	@coconutkikko
砧	
香子	@kyoko_shogi
九條夕星	
くろだたけし	@tkuro2016
高野蒔	@flour70percent
棹流	@saoru_xyz
坂口栞	
澁谷幸司	@kainohi1
寿司村マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
砂山ふうり	
多香子	
tankalife	@tankalife31
千原こはぎ	@kohagi_tw
つくだとしお	@toto_books
低体温℃	@teitaiondo
透過うか	@touka_uka_
とのもづかさ	@tonomozukasa
内藤うく	@naito_raku
中村成志	@nakam8
七澤銀河	@Ginga_Nanasawa
埜中なの	@nanoTANKA
袴田朱夏	@hakamada_shuka
畑　依裕	
平本文	@aya19880109
廣珍堂	@Hirochin_dos
笛地静恵	@Xmcx6rhzyjEZgwq
福山桃歌	@momoka_fukuyama
古井　朔	@saku_furui
古井久茂	@fulidom
御糸さち	@MEATsachi
水上歌眠	@kamin_plz
南の島	@_nrkmnm
みはうひたき	@osyoyuu
宮下一志	@llama_miyashita
宮嶋いつく	@miyazima_izq
みんみん	@jttk9X4RwH5rxNT
六浦筆の助	@Tohakumutun5057
村田一広	@mucci2022
森内詩紋	@NJq4oEvg5gJcRpu

計55名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

余白、千年

明里水せ

五年ほど過ごしたタイムカプセルの余韻に浸る　反射している
朝日には敵わないままきみとゆく夜行列車の旅路のゆくえ
銀色のひかりに乗って僕たちの世界は窓をひらいていくよ
珈琲にたらした秘密あまにがい液体をのむ夜は更けゆく
まだ遠い金木犀とあこがれを大鍋に入れ魔女が笑った
蠍座のしっぽを追って駆けてゆく幼子の背は聡明なまま
赤かがちその目を見やる恒星は燃えるさなかに輝いている
もう終わり閉じた絵本のページには空にのぼった英雄がいた

Cathexis

井倉りつ

世界から光が消えてこのままじゃあの人の顔を忘れてしまう
いたずらが好きな飼い主だったからいじわるしてるだけだと思う
帰らない人を待つ犬と呼ばれて帰らないなんて誰が決めたの
つまらない人生を詰まらせてゆく　あの人がいないせいじゃないから
Cathexis　撫でてくれた手　頬の匂い　おいで、って声　前が見えない
首輪とか要らなかったしこんなものなくてもずっと誓っているし
目から水　水のおちる音　あの人が好きだった色の傘をさがして
今さらのさらのまだ先　渋谷駅　人はこんなにあふれてるのに

「難路」

石川順一

満月は少しおぼろで飛行機が点滅して居る赤緑オレンジ
目の前をウスバカゲロウ飛んで居る地面に落ちるかそけき音する
作風を雲の形に擬える灰色になればやる気が湧いて
クラシックギターを燃やす愚か者亀が小雨で甲羅干しする
富士山は曇り空では見えなくて自販機の茶を三日かけて飲む
山道の坂を上れば足止まる速さに山鳥一羽も分からぬ
理髪店緑と白で出来て居る歩き疲れて川覗き込む
未舗装の難路で不安を感じたりイトトンボこんなに少ないものか

屋上獏部33「戯れ」

宇祖田都子

水のないプール経由の屋上で光と水の匂いが違う
あなたには踵を踏んだ上履きを並べたように見えるのですね
屋上のフェンスの上に正座した幽霊はまだ部員ではない
足音は立たないけれどおしゃべりは大好きですよ　夢は見ません
獏は目が悪いですけどやわらかい足の裏なら大丈夫です
幽霊は人間よりも夢側に位置しています無条件です
気が向けば獏に食われて増えてみる幽霊部員としての戯れ
幽霊に生まれたからは幽霊としてこの死後を満喫したい

ボスポラス卿

柿崎薫

不意に全て全て覚えておきたくて　せんせーと呼ばれ先生になる
イスタンブールは今日も晴れサバ釣りのおやじの会話で知るロックダウン
店先で野菜袋が揺れている午後には寿司にされちゃうアボカド
レポートの一人称の「俺っち」にいいねをしたい自分を殺す
ボスポラスという響きのラスボス感　ボスポラス卿　ボスポラス嬢
お隣に越してきたベルギー人にサソリの殺し方を訊かれる
貨物船　月　ねむる野犬　祈る声　赤子のように水抱く帰路
飛んできたわけではないがここにいる　野菜を選ぶ女たちの手

デバッグ

梶原一人

鏡の中のわたしがだんだんと遅れ始めて笑いはじめり
海馬に隙間を開けておく　出たり入ったりする猫の記憶
向日葵の絵に額縁をあたえれば次の朝には枯れてしまいぬ
ひざまずくわたしに椅子は座りつつ鳥の言葉で愛を語らう
例えば、両性具有　種無しの桃と葡萄と蜜柑と心
すべてのものは動いていると爆心地の裸婦像が溶けながら笑う
解剖の実験用に造りたるレプリカの鳥　内臓軽し
殺されし時の記憶を持ち寄りて順に出し合うウミガメのスープ

玄奘三蔵になるワタシ

歌島孟

命題を解けずに白む長安の朝に軍馬の嘶きを聞く
わが足を差しとどむるは我ばかり　国の境の一線を越ゆ
再会を誓った王の笑みだけが熱砂に閉じた眼裏に顕つ
雪覆う山を越えれば天竺と告げられ胸は澄みきった空
何も無い、無いぞ。と教えさとすようにバーミヤン石像はもうない
夢だったインドの広い高原（プラトー）に、今は夕陽を浴びて笑おう
まだ学ぶべきことがある。ナーランダ、果てなく遠い月の光よ
三蔵院伽藍の上を天高く觔斗雲かと駆ける銀翼

空は低くて

涸れ井戸

前職の旧知と出逢う約束がケシ飛んだ六月の日曜
No War を語る会空き席があり申し込む六月の土曜に
豊中の空は低くて飛行機が大きくワッと横切ってゆく
デモ中のコールについて提言が世直しとリテラシーと夕立
夕立が止んだころミニプラカードおのおのメッセージを示す
帰り道松屋に寄ってチミチュリソース豚定食を摂取する
六月の日曜の阪急電車なにげない一日の尊さ
新しいスマートフォンに二十年会ってない友からのラインが

8 Yellow Tales

北乃銀猫

割る前の卵を落としただけなのに誰かの声がギルティと言う
レモネードじゃないレスカを飲みたくて炭酸水を足してみたけど
なにもかもおかしいままだ信号は赤にならない駆けだす右足
菜の花の畑はまるで大海で風が織りだす波に溺れる
KEEP OUT　ここから先は僕のものではない印黄色い拒絶
目立ちたくなくてもいつか必要になるから持っている蛍光ペン
囀らぬカナリア何を考えて黙したままの生を選ぶか
雨の日の黄色い小さな集団を未来へ届けよ客人（まろうど）だから

スパへ行こう

北谷雪

選ぶものだけに囲まれる日々にいて知らないリンスをこわごわと押す
水圧にわ、わ、わ、と耐えながら笑い出しそうなジェットバス好き
さらさらと撫でれば皮膚は水草の呼吸のように泡を放した
露天湯へ向かう引き戸をゆずり合う服あるときと同じ仕草で
眠るまで背中を撫でてくれた手を思い出せそうな夜の寝湯好き
「整う」の説明のためそのひとは「多幸感」と言う　囁くように
しあわせは胸下あたりに揺蕩えば十分でしょう　深く吸い込む
ドライヤーの風越しに聞く濡れ髪のあの子はアイスを食べたい食べたい

いつかの夏物語

橘高なつめ

物語みたいな出会いあるのかもパンをくわえて遅刻する朝
まっすぐに揃えられてる前髪を全開にして下る坂道
ときめいたボロボロになった漱石の「こころ」を貸した夏のあなたに
おむすびを食べてお昼は簡単に済ました後のデザートはパン
君のいる夏をたくさん綴じ込めて青いページは波打っている
河原までチャリを飛ばしてハアハアと体育座りして待つ花火
泣きそうな顔をしているウルトラの母のTシャツ着ているくせに
いつもより近くで君の声を聞く祭り囃子に消えないように

なつのひ

砧

休みたいという声聞けばほんとかなやっぱりちょっと疲れてるかも
やりかけのこと放り出し冷蔵庫にくっついているタイマーをとる
タイマーをかけてベッドに横になる少しばかりの昼寝の時間
半分は寝ていて半分起きている耳に残るは鳥の鳴き声
腕伸ばし足を開いて大の字に誰も見てないはずの部屋にて
顔にかかる風の涼しさそよそよと網戸から入る風の涼しさ
ピピピという音すれば目をゆっくりと開けて己の心に潜る
もう少し休みたいという声聞けば上げし頭を枕に戻す

dans l'obscurité

香子

左手の指輪が君の柔肌(やわはだ)を傷つけぬよう外した音は
一つずつ衣(ころも)をはいで残るのはシンプル過ぎる名もなき本能
生活の断片をふと見せ合って境界線の手前で止まれ
「会いたい」の気持ちが記憶追い越して君だけ足りない梅雨入り間近
遺書を書く誰かに見せるわけでなくあたたかな雨文字が滲んで
この腕に使命を与えよ意味なんて無くても君を一人にしないと
安心や御守り求めることはないささやかだけど矜持と言わせて
いつの日か役目を終えて薄らいで見えなくなっても君は光だ

虫がいる

くろだたけし

やわらかい淡い緑にまぎれこむまだ強くなるまえのカマキリ
アリたちが力を合わせ作る巣の出入りのための穴が無防備
紫陽花をたずねてチョウとハチが来て近くにいても無視されている
地上から二メートルにてむつみあうチョウの羽音のしない羽ばたき
目のゴミのように小さなハエがいて殺したことも感触がない
ツメのある足で畳を歩いたら足音がする大きなバッタ
交渉の手段があれば月々の家賃は出すと言いそうなクモ
土のないテラスで死んでいた虫を風はころがしアリは処理する

夏至のゆうれい

高野蒔

ゆるされるなら各駅に停車する乗りものだけに乗っていきたい
譲られるままに日陰にふくまれて涼しく待ったバスが来るまで
横にいるときの眠気を伝えると微かにうれしそうな相槌
まどろみに半ば沈んでいる席で袖の境界線が重なる
夕暮れは紫陽花いろの水をのむ馬を眺めるには足りなくて
透明な空に眩しい六月の青をつばめが縫い留めてゆく
隧道を語るあなたの内側に不意にひらける湖がある
向かいあう目の細かさに掬われて夢見心地の夏至のゆうれい

COLORS

棹流

月白のひかりを浴びて瞼閉じヴェールを纏いステップを踏む
待ってます花緑青(はなろくしょう)のみずうみで私の恋が届きますこと
無垢だった心の中のぬくい日々　夕暮れどきの唐桃のごと
きみの前儚くきえた恋ごころ朱鷺色の雲すべて見ていた
夏夜空　青藍(せいらん)深くすい込まれ銀河のふちに舟を浮かべる
翻るきみの真白いワンピースまどろみの風　秘色なる恋
暮れてゆく静かな波のあわいより花紺青(はなこんじょう)の海に小舟を
すくい上げ素足のゆびに砂がかむ玉虫色のなにかの鱗

これから

坂口栞

あの星は生まれたばかりの星だからまだまだこれから苦しいだろう
足首とくるぶしの丘それだけを両手ですくって見せてあげたい
目覚めたら白いお皿の上で白いワンピース着て白く踊って
せめてまた去年と同じ服を着て去年と同じケーキを食べたい
数撃てば当たると思い水を飲む全ての細胞生まれ変われと
部屋の壁は白と決まっているのだろう悪い奴らに見つかるように
一人でもいられるように集合も尊いように人間と歌
なんとなく祈りのかたちした歌が不機嫌だから短冊に書く

真夏(なつ)の夜の夢

澁谷幸司

木の間より　月の零るる　森かげに　誰が呼びしこゑ　夢かうつつか
夏草の　露に微睡む　想ひびと　たどる小径に　妖し風吹く
花の香に　惑へるこころ　知らぬ間に　吾妹(わぎも)が名のみ　口ずさみたり
微睡めば　月の雫の　降るごとく　眼蓋の裡に　面影浮かび
風吹かば　花影のみぞ　ゆらぎつつ　うつろふ恋の　夢路なりける
夜明けして　互ひの顔を　見合ふれば　何を争ひ　何を恋ひしや
梢より　笑ふ妖精　影過ぎて　夜の騒ぎは　露に紛るる
見し人ら　拙き芝居に　笑ひつつ　真夏の夜の夢　幕となりけり

天気予報

寿司村マイク

歯磨きの朝のテレビに水色の椅子が動いているのを見ている
水遁（すいとん）の術を使って今日もまた決して気づかれないように待つ
暖かく湿った空気が流れ込みふたりの間はこれまでどおり
大切な一瞬としてもう味のしなくなるまで擦った記憶
舞い上がらない・期待しないのに落ち込みの呼んでなくても来るのはなぜか
公園に土ごと捨てたサボテンもアルカロイドは含まれていた
熱帯性低気圧が来てカーテンを開いた部屋に風が吹いても
〈時々〉を引かない自信は謎にあるあしたの天気はわからないけど

S（UNAYAMA）F　村穂

砂山ふうり

本体はもはや存在しないのにリモコンだけが神棚にある
まんなかに止まる、止まらぬビー玉をお盆にのせてひだまりの中
車窓から夕陽の鱗剥がされて鉄橋過ぎる電車ぴちぴち
火の玉もガラスのように砕かれて落ちていそうな扉を開ける
三日間トイレの中にいた蜘蛛をティッシュに包み朝顔に置く
ミサイルがミサイルを抱く瞬間をぼくらは空に見るのだろうか
エレベーター蕾のように夜にのびて花びらひらくはるか海まで
スマートフォンあれば俺でも信長と互角に渡り合えたさきっと

ケセラセラ

多香子

恋猫を争そうオスの喧嘩さえ見られなくなり都会は梅雨入り
今日咲いた朝顔二つお互いにコンプレックス隠すその色
さらさらと記憶失くして砂時計なつの浜辺にねむり誘われ
狸でも暮らせないだろ化かし合い虚実ないまぜ人間界は
隣家には人待ち顔の女いてこっそりあくびしている昼顔
湯上りのほてる身体で君待てばレモンサワーに月のきらめき
日々揺れる心模様をもてあまし長きに巻かれる夕顔の花
今はもう思い出となり傷も癒えまた懐メロで聞く「ケ・セラ・セラ」

雨音に負ける

千原こはぎ

紫陽花と薔薇の明度をおとす雨　追いつくように六月はくる
初期化するカードに雨は降っていただろうかひとつまたきみを消す
必要なときだけ開ける引き出しに日々をふたりをちいさく仕舞う
雨の日がふえてゆくのを受け入れて傘を買うように歳を重ねる
ほろほろと胸が零れるこのひとの愛のことばは借り物のよう
結局はひとり　あなたの目の熱の燃滓が灰になる日がきたら
雨音に負けるくらいの声で言う最後のことばは聞かなくていい
遠くなる雨雲　聞こえない足音　青信号をやっと渡った

うたかたの夏

つくだとしお

梅雨まぐれ風は西向き大安だバナナフィッシュを狩りに書店へ
フェア棚に春樹と深月が鎮座して夏の百冊　お布施だ財布を
狂乱の本読み放題ドーパミン限定カバーに見とれテアニン
夏なれば岩波文庫に手を伸ばし千年の毒ボルヘスに酔う
血吐きつつ写実貫く子規与ふ歌論をわが血に歌よみの業
わだばゴッホになるといふ棟方志功を彫り鬼となるマハ
浮かれたるたましひ刹那こほりつく梨がつづるは「実話ですが」と
百巻（ももまき）の物語終へ現世（うつしよ）に戻ればからくり「精算を」といひ

どろどろ

透過うか

どろどろの感情の渦にのみ込まれ　あたしは苦しい　貴方は眩しい
どこまでも付いて行くからこの地獄導くあたしの光になって
夢の中だけなら右手繋いでも許されますか？　いいえ、それでも
期待したあたしがやっぱり馬鹿だった　ハッピーエンドに手が届かない
胸を張り空気を大きく吸い込んだ　貴方と視線が交わるように
ああどうか　こんなに醜い感情を抱えたあたしを抱きしめてくれ
目の端で捉えるよりも足音で貴方をもっと理解している
明日もあたしを覚えてて　またねって呪いをかけた　愛しています

「もしかして」

中村成志

あやまちを周りの他人に償わせそれでもまるく収まる動悸
昨晩は雨か　舗道がアベリアの星の真白に埋められている
「もしかして」訊いた画面に尋ねられ夏の気温となる「もしかして」
炭と脂の匂いがあろう縄文の男が子らを抱き眠るとき
透き通れ夏すきとおれ糖の山　完熟梅をつききりで煮る
絹ごしへオリーブオイルと塩を振る梅雨の最中の熱波の夕に
午後三時事務所の外に走る子らランドセル背負って日傘を差して
油焼き茄子をポン酢に漬け込んで半身浴のための脱衣を

Thirsty Moon

七澤銀河

お別れの言葉は空に燃え尽きたUnknownの文字と引き換えに
亜麻色のヒジャブの中で濡れる目の中に浮かんだ色のない月
重ねれば重ねただけ形を変える嘘の数だけ澄んで行く人
思うより世界は小さく出来ている悪意は何処にでも落ちて来る
肝心な箇所だけを切り取った夢　知りたいことは君の消息
宇宙から届いた波形を並べ替え音色をひたす鄙びたハープ
月食を横切って行く銀の舟　君をただひとり閉じ込めたまま
逆向きのタロットカードをもう一度逆に並べて星を惑わす

風八首

袴田朱夏

走る子のすべてを測りそこねるよ風の座標で分けへだてなく
太陽と対等だったことのある北風さんのような国です
風のない夜にしずかに月はあり月のどこにも風は吹けない
信号が青になっても一台も車のいないときの風だよ
そうだけど生きていいとか悪いとかないのは風とおなじだじゃあね
こんなとき風のうしろにあらわれてあなたをなぐさめるはずだった
でもそうじゃん？　ウチに子どもがいなければしなかったスキップのその風
敗戦の日からいままで吹いている平和の風よやさしくつづけ

入院

平本文

突然の入院決まるうずくまり立てなくなって電話をかけた
突然の入院延期外泊ができずに一人でこっそり泣いた
突然の退院決定嬉しくて眠れぬ夜をすごしたりけり
看護師のやさしさにふれ回復し無事に退院ありがとう
院内にいろんな人が困ってて親元帰れずひとりぼっちで
退院の間近にトランプしてくれたひち並べとババ抜きしかできないけれど
カフェインがずっとダメだと思ってただけど飲んだら大丈夫だった
退院後デイケア通う予定あり茶道が楽しみちょっと極めたい

闇あうん

廣珍堂

日は暮れて闇とそはそは話したり桜の花の色深くなり
零時過ぎ気配だけなり睦言の終はりのごとく闇に溶けむと
グリ下に十代の闇騒ぎしと交番前のひとら噂す
この下に迷宮の闇あるらしと大阪駅から階段を降る
地下鉄も全く変はつてしまひしか出口探せば隣の駅に
はつなつの若葉の下に闇ありや高校生の男女座りて
蜜蜂はブーケの闇へ戻りたり巣箱が並ぶビルの屋上
戦争の骸葬る闇いくつ穴を掘ります明日も掘ります

夏芝居

笛地静恵

異世界のよろい姿の武者人形クマの背中を走れまさかり
甚平のお寺の僧とまちがわれおばあちゃんから拝まれている
恐るべき君らの太ももスカートのゲリラ豪雨を蹴とばしていく
香水がお嫌いですか車掌さん歩みを止めず通過していく
夏の日の怪異を語る冬の夜の高野聖はうつ伏せに寝る
短夜の文庫のページあとわずかネモ船長の最期を看取る
夏芝居はねたあとから悪役と村一軒の居酒屋荒らし
日の本の山河をひらく罌粟の花いつのまにやらお顔を見ない

水に満月

福山桃歌

約束は水辺に揺れる満月の輪郭　揺れて歪んでたわむ
わざと手を振らなくたってあなたには気づかれなくてつぶれる呼吸
月よりもはるかに遠い気がしてる太陽みたいな熱に灼かれて
吐息からやわく開いてくちづけの形あなたの名前を呼べば
絞り出す声が月まで届いたら泣き出す前に赤く染まって
まばゆくて目を逸らしてる暗闇が縮こまるほど光のあなた
つやつやの小石をそっと投げ込めば吸い込まれてく月の奈落へ
ぼんやりと灯るあかりに導かれ静かに紡ぐ次の約束

雨乞ひの巫女

古井　朔

雪白に昏き灰は降り止まず未だ芽吹かぬ大地は消えて
浮かび立つ白い焔は鳥の空　ルネ・マグリットの大家族
銀湾を漕ぎて契りし星今宵　雛星に遅れて昇る月の船
感ぜざる星の流るる痛みさへなればなるほど子の痛みさへ
汝らの贖ひ終わらず続きをり父から娘へと咲く女郎花
宿り木は鳥のためでなく木のために純朴なる聖書に近き人々よ
灼熱の畑で立ち枯れしトマト供物となりをり雨乞ひの巫女
撓みたる果実の光異性化に脳の痛み吸ひとらば吸ひとられよ

なつたてまつる

古井久茂

ミニバンのスライドドアを開け放ち黄色い鼻緒がカランカラカラ
境内に由来なんかは何ひとつ関係のない屋台が並ぶ
昨晩はなかった電線の蔓にゆらんゆらんと実る提灯
ひゅううどん両手を振って茜さすきみがかけたらどどんぱらぱら
じゃりじゃりのコンクリートの欄干に人も一緒に浴衣を干して
うしろから押されるたびに立ち止まり駐車場までむあむあがゆく
ぽんぽちゃぽんぽちゃぽんぽちゃ街灯下を帰ったらゴミになる音
よく錆びた軽トラにガシャンガシャンと屋台のもとを押しこみましょう

一首だけ私の歌が泯ざっている

御糸さち

もう読まない絵本の墓だ　うーやんの影からおひめさまが見ている
りんごかもしれないけれどりんごではなくてなしかもしれないはなし
手を挙げて意見を言って手を下げて口閉じるくるみ割り人形
よく読んだ図鑑は見すぼらしくなりありがとうアトラスオオカブト
ミナミゾウアザラシ並の体脂肪率の体をゆらして歩く
もう読まないけれど捨てたくない絵本　英和辞典と肩を並べて
目で耳で取り込んできた物語あなたのどこに眠っているの
羊って死なずに雲になるらしくお空にのぼるまでが牧場

奪われないガーデン

水上歌眠

植えられた木とそうでない木　光の順番で露ひからせて朝の角度に
力ない韻律をもつ下草を　踏まねば生きていかれないのに
奪われる感覚があり話せないガーデンに白い椿のあること
水を撒く／撒かないどちらが良いのだろういつか小鳥を埋めた樹の下
動かせない石だけ残して去ってゆく　どのたましいも旅人だから
砂利は川　川は天から来たという世界は小雨に閉じ込められて
奪うものすべてを避けてゆくとして梅雨の眠気は赦してもいい
誰一人見たことのないガーデンを　薔薇の名前を覚えるように

スパイス

南の島

別添えの辣油で辛くなりすぎる少しの変化がほしかったんだ
飽きの来ないよりも最大風速で好きなものだけ抱きしめている
わたしだけは渡りきってから曲がる黒いところはワニがいるんだ
君としか来ないラーメン今日は言う　おろし生姜をつけてください
今こんな暑かったら夏裸やな　なわけないやろ　毎年言おう
風呂洗うだけで疲れるようになりそれでも旅に出たいと思う
チャイ嫌い？　好き！好きだよ　何回も言う
使うほど増える歳とるほど育つものはなーんだ？　水をあげよう

U+21A9

みはうひたき

晩年の比喩が秋とか冬じゃなく金曜日だと少しうれしい
羽化をする蝉のま白さもう少しきちんとヒトになりたかったな
パスワード2度まちがえて残された1度を生きるまちがわぬよう
ながれにはさからえないし世のなかの再生ボタンすべて右向き
永遠を信じたい夏　ファミマから好きなお菓子が消えてしまった
ひまわりがこわいと聞いてこわくなったこわがりかたを覚えてしまった
いちど着たら捨ててつぎ買う　金持ちになりたい金だけ持って生きたい
↩ボタン逆再生の雨を見るいつに戻ればしあわせですか

市民図書館

宮下一志

図書館にテラス席あり病休のおかげで〈市民〉を享受してゐる
文学の棚に斉藤斎藤の歌集がありて笑みのこぼれる
文字列の意味がわかつてきた春に文意は糸に似てゐると知る
小一時間目をつむれどもだれからも注意されない白き自習席
疲れやすき身体となりて中庭のひとひらづつが散るのがわかる
まだ休みであつてほしいともう復帰になつてもいいが混じるすぢ雲
すこしづつ歩いてゆかうこの脳を古き木管楽器に見立てて
夢のなかまで出てきておいでさみしさを連れて来たれるとんびの地鳴き

金魚なら飛べるかもしれない夜空

宮嶋いつく

エナメルの絵の具の色味に似た夜空毛布のようにやさしく拡げ
金魚なら飛べるかもしれない夜空うるんだ風に流れるように
あじさいと薔薇のあいだを縫うように羽衣のひれひらめき踊る
新月の夜の底からあぶく立ち水草みたいに視界が揺れる
カニ歩きしながら逆さに回る時計西から昇る光の紅さ
夕暮れの空に混じって飛ぶ金魚口をぱくぱくまぼろし吐いて
不夜城の光　アンコウ　ほたるいか　ダイヤモンドの塵に飲まれて
空を飛ぶ金魚を追ってぼくたちも猫も飛び立つ群青の中

習作　ワイエスのつぶやき

六浦筆の助

主は雪を見んとカンテラ置いてゆく聖夜の迫る太き灯台
石垣を船のごとくに組み上げて空をかくべくオール一本
教会の鐘揺れるのを見たくとも紐は階段下までだらり
家区切る有刺鉄線ただ一本、悪魔が風にかかればよしと
闇まとい静かに絵筆とりたくて小さき窓の小屋にまたいる
霧の中妻が指さす灰色の軍艦に似た人見えぬ家
気配なき部屋の窓から海風がカーテン揺らし部屋が生きだす
もくもくと日々働ける弟は煙と音を言葉のように

吹き荒れる赤い嵐

村田一広

歩いたり駈けたり転んだり生きてゐる限り人生のランナーみんな
台湾に着いたら夜市　碧い瓶で手頃なサイズの台湾ビール
紫陽花の変幻自在今週はピンク基調のパステルカラー
本棚の空間が埋まらなくつて出目金の金魚鉢置いてみる
ワルツ踊つてゐるうちもはや人間か人形かＣＧか分からなくなる
夕焼色のカーディガン掛けられて真夜横たはるベッド夕焼
信号が赤ければ赤い風が吹き歩行者の間に不安が抜ける
赤い砂に火星の君が溺れるころ地球の僕も砂嵐の中

夏至祭にて

森内詩紋

価値観が合わない場には居どころがない　ため息をぐっと呑み込む
励ましはせずに事実を提示してあなたは今日を始めてくれる
悩みって気づかなければいいのにねゾートロープのようなものだし
雨がふる途切れずにふる相づちを打つようにふる肌寒い夏至
たぶんこれで流れるだろういくつかの本当に重い「いし」以外なら
飲んだことないものを飲む　食べたことないもの食べる　「知る」を味わう
挑戦が得意になったたいていのミスをあなたは気にしないから
くりかえすものなどなくて毎日がワンダーなまま夏がくるのだ

テーマ詠「海」

海の色もう鮮やかなはつなつの遠い記憶とたわむれている
◆明里水せ

（海からの風が呼び起こすいつかの誰かも含め）きみが好きだよ
◆あき子

生きていくことを怖がるのはやめて海すれすれの星を捉えた
◆麻倉ゆえ

涙腺の波浪警報　沿岸部、まつげの皆様ご注意ください
◆井倉りつ

雲は今海の色彩反映しサイダーを飲む二人を照らす
◆石川順一

だいじょうぶ渚は海の誤差だからわたしのことを気にも留めない
◆宇祖田都子

雨となり馳せる想いは山に浸む行く先知れぬ旅果ての海
◆うみ

最初に空それから海につづく道ぼくたち羽も鰭もないんだ
◆泳二

生き抜いて　夜の海まであと少しウミガメの旅深い砂浜
◆織部ゆい

海なのに蝶々がいて遥かなるパンタグラフのための羽ばたき
◆柿﨑薫

はてしなく続く廃線跡あゆむ老人と犬　海はいずこか
◆梶原一人

荒海を越えきて眠るコンテナの胴には長く錆びた傷痕
◆歌島孟

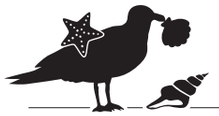
関西に住んでいるのに海遊館行ったことないいつか行きたい
◆涸れ井戸

この海に身をまかせてもいいここが藻屑になれる白い海でも
◆北乃銀猫

空色のリボンを選ぶ晴れた日の海岸線へ繋がるように
◆橘高なつめ

見えるかな地図では近く見えるけど海の向こうのシチリア島は
◆砧

綿津見（わたつみ）の　沖に漕ぎ出づる　海人舟（あまぶね）の　楫の音さへ　寂しかりけり
◆九條夕星



あたたかい素足のゆびにからむ砂とうめいな海一歩手前の
◆棹流

海はもはや心拍だった　ぬるま湯に濡れて静寂（しじま）へ還りゆく夜に
◆tankalife

砂浜に並んで見てたあの海を思い出さないよう海を見る
◆千原こはぎ

還りたい陸に意味など持たぬから化石海水抱いて乞う貝
◆低体温℃

海よりも深くみえる優しさであたしのわがままぜんぶ沈めて
◆透過うか

貝殻のつめたい風に耳をやるよせてはかえすなみなみなみだ
◆とのもづかさ

シースルーのシーって海のことでしょ？と聞く君につい言っちゃった「うん」
◆内藤うく

砂浴びのあとの窪みを「残り香の海」と命名しよう夕凪
◆中村成志

鋭敏な手つきで梨を剥く時の韻が彷徨う地球儀の海
◆七澤銀河

肺をひらく　深い呼吸の骨（こつ）なるは黙（もだ）し海底（うなぞこ）に横たわること
◆埜中なの

いつかまた会わなくていいありがとう海は振り返らなくても海
◆袴田朱夏

太陽を雲が呑みこむ海までに追いつかれたらわたしも終わる
◆畑　依裕

あのときの海も広くて青かったある夏の日の旅行の午後は
◆平本文

踏切が聖地と集う外人ら日本語の海ちゃぷちゃぷ渡る
◆廣珍堂

海の家泳ぎ疲れて大の字に寝転ぶ莫蓙の潮の香りよ
◆笛地静恵

涙って小さい海ね　呟いたきみの瞳がたゆたえば夏
◆福山桃歌

オーロラのフォトン満ちたり紫紺の海にやがて消えゆく残留思念
◆古井　朔

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

どうしよう耳から海が止まらない貝殻なんて持ってないのに
海に降る雨を海って呼ぶようにすきが数滴混ざっただいじ
人の世は荒れ狂う海　傍に見てタイドプールにひそむウミウシ
さよならが海を旅して届くなら私はもっと自由になれた
わだつみとみそら行き交ふ水鳥にならせ給へや美輪の名の方
海から生まれた人間は陸地で渇きさうになるとまた海めざす
湾じゃなく浜だからかな僕を呼ぶあなたの声が高く聞こえる

◆ 御糸さち
◆ 南の島
◆ 宮嶋いつく
◆ みんみん
◆ 六浦筆の助
◆ 村田一広
◆ 森内詩紋

真夜中にさざめく月がこんなにも遠くにあると告げる教科書

七澤銀河

一首評

にぎわいを感じるほどに明るく燦めく月。しかしその光は、約1.3秒前に放たれたものだと、教科書に書かれている。ロマンの喪失と、知識の従属。相反する感情が身の内で同居する。

「こんなに」「遠くに」「教科書」と、伸びる音を適所に配置することで、玉突きやロケットブースターのように、一首の流れを先へ先へと進ませる効果を生んでいる。

中村成志

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

ご投稿はこちらの投稿フォームから！

短歌リレーコラム 望遠鏡 33

短歌にまつわるあれこれについて自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手　スズキ皐月

テーマ　とにかく楽しいことを（ついでに本を）

2026年5月4日、『歌の種　東海短歌アンソロジー二〇二六』というアンソロジー本を発行した。名前の通り東海三県の歌人を集めた短歌のアンソロジー本で、条件としては歌歴十年以下の人を募集して企画した。色んな人の後押しがあったり、編集の永井文鳥さんや解説をお願いした荻原裕幸さんの多大なる助けを得てなんとか完成までたどり着き、東京文フリなどで販売するに至った本だ。結果として四十六名に十首連作を寄稿していただく大変豪華で良い本になったと自負している。まだしばらく販売しているので是非手に取っていただきたい。

と宣伝はここまでにして、この本が完成してから度々思うことがある。短歌というジャンルに限ったことではないのだろうけど、ビギナーの作品ってまとめて読む場所って本当にない！

先に紹介した本を企画した理由の一つがその不満から来るものではあって、若い人が集まりやすい大学短歌会の古くからあるところの少ない名古屋にいるからそう思うのだと思っていたが、落ち着いてから考えるとどこの地域もそうなんだと気づいた。

もちろん現在はネットの時代であり、短歌を始めてすぐの人が個々人で自作の短歌や評を発信公開することは簡単ではある。だがそれは逆に言えば大量の個人の作品が溢れすぎていて、特に自分と縁遠い人の作品なんかは見つけに行くことは偶然以外ではまず厳しい。

そんな状況に対してはアンソロジー本みたいなものをどんどん出して欲しい気持ちになる。特に私は地域性みたいなものに興味があるので、地域ごとのビギナーの作品が読みたい。そういった本を作ることはもちろん簡単なことではない。だが、段階を踏んでいけば不可能ではないのではないだろうか。

段階として最初のステップとしては交流を広げることがあるだろう。言うは易しかもしれない。だが短歌にはそれを叶える文化があるではないか。そう。歌会である。特に超結社のものならビギナーの歌人も参加しやすい。実際筆者も自分で歌会を隔月で開催しており、そこで得た交流に助けられるところがかなりあった。別にアンソロジー本を作るのを目的に歌会を開いていたわけではないが、切磋琢磨する仲間を増やすことはできるし、それはそんなに悪いことではないのでそれだけでもオススメではある。

これも短歌に限った話ではないけど、やはり少しずつでも行動した方が楽しめることやできることの幅はかなり広がる。だから歌人の皆さんはどんどん楽しいことをして欲しい。そしてもし可能なら楽しいことのなかでできた仲間で作品をまとめた本を作って欲しい。楽しみながら作った本を欲しがる人はきっと少なくないはずだ。

リレーエッセイ 33

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　位置
書き手　よつば

幸せになってください私には見えないけれど聞こえる場所で

よつば

会いたくは無いが、「幸せらしいよ」という噂が聞きたい。

友人に言われて許せなかったことはあるか。最近流行りのフレネミーとやらではなく、自分が心から信頼していて好意を持っていた所謂友人に。私はある。怒ったし、泣いたし、顔も見たくないと思った。怒りだけは風化した。アンガーマネジメントとはよく言ったもので、六秒までとはいかなくても怒りを忘れることができた。しかしそれではい仲直りとはいかない。月並みだが傷が治らなかったからである。どれだけ時間が経っても、顔を見るとその人に言われたことを思い出せてしまう。新鮮に傷つけてしまう。こういうことが何故だか複数回あって、そのたびに立ち直れないほどではない怪我をしている。生活に支障がないくらいの打撲。

位置が違うのだと思う。誰かの中にいる私はおそらく、私が立つべきではない場所にいる。

「仲の良い友人」という位置に「私」を置いているとしよう。この場所が人によって違うのだ。「大切な人」という敷地に入っていることもあれば、「家族」に近いところにある人もいる。危ういのは「何を言ってもいい人」「傷つかない人」「自分の理解者」「優しい人」「気にしない人」等と位置を重ねている人だ。

実際いるべき位置はどこだろう。少なくとも「傷つかない人」ではないし「何を言ってもいい人」でもない。親しき中にも礼儀ありを実践で学ぶ羽目になった私のなんと可哀そうなことか。位置を変えて欲しいと頼んだところで「そんなに繊細だと思わなかった」「ちゃんと怒ればいいのに」そう言われるのがオチである。

なるほどもっと感情的になるべきか。私は人間だと会話の中で知らせるべきだろうか。見ればわかってくれると思っていたが目論見が外れていたみたいである。友人からは「私」が人間だという知識が抜け落ちていて、その上関係性だけで私を捉えている。

「私」という人間は「仲が良い人」で「傷つかない」し、「自分の理解者」だから「何を言っても」「傷つかずに」自分の言い分を分かってくれるだろう。？

残念ながら私には感情がある。よって理解できることと傷つくことは両立し得る。都合のいい機械ではないので、理解だけして笑ってあげることはできない。

厄介なことに私には感情がある。まだ友人の不幸を願うことが出来ない。顔を見たくない相手の幸せを願うのは奇妙な心地だ。恨んでいるのに近況を知りたいと思う。私を傷つけた自覚があればいいと思いながら、そんな罪悪感は忘れてほしいと思う。

そして心から幸せになってほしいのだ。ああ、顔も見たくないのに。

ご感想はこちらまで！

Twitter（現X）ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter（現X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

今号のうたそら

2026. July No. 33

参加歌人様 …… 55名
連作欄 …… 42名
テーマ詠欄 …… 41名
一首評 …… 1名

リレーコラム 望遠鏡　スズキ皐月 さん
リレーエッセイ いちごいちえ　よつば さん

ご寄稿いただきありがとうございました！

短歌募集

くわしくはこちらから

2026. No. 34 〆切 '26 8/31（月）24時

8首の連作	テーマ詠「夕」1首	一首評「そらよみ」

2026. No. 35 〆切 '26 10/31（土）24時

8首の連作	テーマ詠「静」1首	一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

編集後記

暑さが日に日に増し、本格的な夏の訪れを感じる頃となりました。体調を崩しやすい時季でもありますが、皆さまお元気でお過ごしでしょうか。わたしは梅雨の間はほぼ引きこもっておりましたが、7月はもう少しいろいろな景色に出会えたらと思っています。

さて、今号もたくさんの素敵な歌をお寄せいただきました。テーマ詠のお題は「海」。皆さまの中にある様々な海のイメージが集まりました。どうかお楽しみいただけますと幸いです。

次号の〆切は8月末、発行は9月初旬です。テーマ詠のお題は「夕」。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

編集鳥　千原こはぎ

うたそら　第33号

発行：2026.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/